

第6表 N426遺跡出土動物遺存体一覧表

区名	遺構名		魚 類						鳥・獣類			分類不能	備考	総重量(g)	サンプル番号
			サケ属			その他			種名	点数	重量(g)				
			歯		椎体	種名	点数	重量(g)							
			点数	重量(g)								重量(g)			
C-7 8	第1号竪穴住居跡	かまど 焼土	42	0.37	0.69				ニシン 椎体?	1	0.01<				
A-6 7	第2A号竪穴住居跡	かまど 焼土	1	0.01<	1.59				中型獣 獣骨片	4 2	0.45 0.11			2.16	③, ④, ⑤, ⑥
A-6 7	第2B号竪穴住居跡	かまど 焼土			0.59							0.01<	不明骨片1	0.6	⑦, ⑧, ⑨
A-6 7	第2A号竪穴住居跡	焼土1										0.01<	不明骨片1	0.01	⑩
C-6 7	第3号竪穴住居跡	焼土3			2.57									2.57	⑪
E-4 F-3 F-4	第5号竪穴住居跡	かまど 焼土	10	0.15	0.46							0.69	サケの歯と 椎体以外の 骨片	1.3	⑬, ⑭, ⑮
合 計			53	0.53	5.9		1	0.01		6	0.56	0.71		7.71	

## 第2節 N 426 遺跡出土炭化種子について (第7表, 図版34・35)

吉崎 昌一・椿坂 恭代

### (1) フローテーション用土壌資料の層準, 採取地点

ここに扱う資料は, 札幌市西区二十四軒3条1丁目N 426 遺跡から出土した。この遺跡からは, 奈良時代後半に若干時間的な差を持ちながら継起したと見られる竪穴住居が5軒検出されている。調査担当者は, これらの竪穴住居中のカマドとその周辺ならびに竪穴外に見られる焼土からフローテーション用土壌を採取している。ここに報告する炭化植物種子は, これらの土壌資料から抽出されたものである。フローテーション作業によって発見された炭化種子は, 第2号竪穴住居跡床面に見いだされた焼土中の分類不明の2種子を除き, すべて各竪穴住居中の生活層に係る場所で採取された土壌から得られており, 住居外の焼土からは出土していない(表7)。

### (2) 出土した炭化植物種子

各竪穴住居から出土した種子のうち, 確実に栽培植物として分類可能なものは, 第2号竪穴住居跡のカマド周辺からのみ検出されたアワ *Setaria italica* (L.) P. Beauv. とキビ *Panicum miliaceum* L. があげられる。第2号竪穴住居跡にはA, B 2基のカマドが存在しているが, 調査担当者はAの方が時間的に若干新しいと結論している。しかしながら, アワ・キビとも両方のカマドの焼土から見いだされており, 出土の様相に差は認められない。だが, アワとキビは出土量が大きく異なり, アワは総数で68粒, キビは総数で4粒しかない。ダメージのため分類が難しく不明ミレットとして扱った種子を加えても, 種子数量の傾向は同じであろう。

図版34にアワとキビの代表的な標本をあげておく。

1 a はアワ穎果で, 矢印で示した箇所にわずかに外穎が残っており, その部分を中央に移動させ拡大撮影したものが1 b である。横に走る突起状の表皮細胞構造の一部が観察される。さらに拡大したものが1 c である。本来ならアワ特有の乳頭突起の細胞組織が観察されるのだが, 資料の保存が悪く長細胞の一部が観察されただけである。1 a は長さ1.2 mm, 幅1.15 mm, 厚さ1.4 mm。厚さは加熱の結果若干ふくらんでいるのであろう。

2 a はアワと同倍率(×35)で撮影したキビ穎果で, アワよりはるかに大きく, 胚の形態からもキビであることがわかる。矢印で示した部分の表層が剥離していたので高倍率(×1000)で撮影し, 2 b にあげた。観察された不整形の構造は糊粉層の細胞壁かと思われる。中に見える細かい粒子は澱粉層であろう。2 a は長さ1.7 mm, 幅1.7 mm, 厚さ1.45 mm。

図版35には野生植物の種子をあげておく。

3 a は球形に近い形態を持ち, ↓で示した部分に横走するヘソが見られる。よく似た形態のものが第3号竪穴住居跡及び第5号竪穴住居跡から総数で19粒検出された。マメ科 LEGUMINOSAE

の種子であろう。3 a のヘソ部分の拡大が3 b。3 a の下半部↓で示した部位周辺には密集する細かな突起が見られ, そこを拡大したのが3 c である。種子表面に見られるこの突起はタコの足型突起のようにも思われる。類似の突起パターンはハマエンドウやクサフジにみられるが, 詳細ははっきりしない。3 a は長さ2.9 mm, 幅2.8 mm, 第3号竪穴住居跡の焼土2から出土。

4 はほぼ紡錘形で断面は角のない鈍い三角形。果皮がとれて種皮部分の露出したタデ科 POLYGONACEAE の種子であろう。4 は長さ1.75 mm, 幅1.0 mm, 第3号竪穴住居跡の焼土3から出土。

5 は長楕円形, 先端がやや細くなる。表面に亀甲突起型の細胞構造が観察されるのでマタタビ属 *Actinidia* Lindl. であろう。サルナシかマタタビのどちらかだと思われる。第5号竪穴住居跡の床面から2粒出土した。5 は長さ2.0 mm, 幅1.25 mm, 厚さ0.75 mm。

6 はやや平たい長卵形, 表面に特有のアバタ状構造がみえる。ニフトコ属 *Sambucus* L. であろう。6 は長さ1.8 mm, 幅1.1, 厚さ0.5 mm, 第3号竪穴住居跡の焼土2から出土。

7 はつぶれた球形で, 比較説明の資料としては好ましくないが表面に南瓜のような凹凸がある。この写真は横からの撮影。種子の形態からみてミズキ属 *Cornus* L. であろう。7 は長さ2.6 mm, 幅3.0 mm, 第5号竪穴住居跡のカマド内焼土から出土。

8 は両端が鋭くとがった紡錘形の種子。雑草であろうと考えられるが, 分類の手がかりがないので不明としておきたい。8 は長さ3.3 mm, 幅1.1 mm。第5号竪穴住居跡カマド内焼土から1粒出土。他の不明種子は資料のダメージが多く同定不可能である。

### (3) 結語

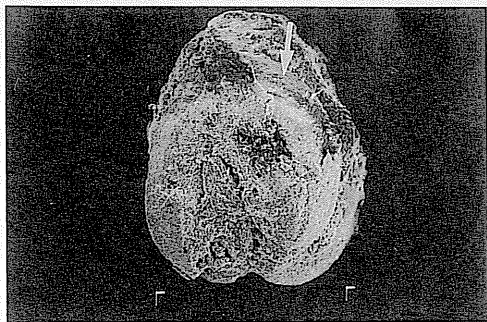
N 426 遺跡では, 大型で比較的保存が良く長期にわたって居住されたと見られる第2号竪穴住居跡のみから栽培植物のアワ・キビが検出された。他の住居は攪乱部分の多かったためにフローテーション用の良好な土壌資料が採取できなかった事もあるが, 若干の野生種を除き, 栽培種の種子が出土していない。

アワに比べてキビの出土量が少なかった事は, 多少奇妙に感じられる。たしかに, 北海道内でこれまで種子分析を実施した擦文時代遺跡を見る限り<sup>(1)</sup>, キビの出土は西暦8世紀後半以降の時期になると普遍的にみられる様に思われる。しかしながら, まだ事例は少ないが, 擦文時代前期あるいはそれ以前の遺跡からは, 出土量が激減するか, あるいはみられない。こうした傾向が, 時間的あるいは地域的なものとして認められるかどうかについては, まだ判然としていない。ただ, 本州東北地方においては青森県八戸市八幡遺跡から弥生時代前期に伴出例が知られているので(吉崎: 1992), 今後の精査に待つところが大きいと考えられる。

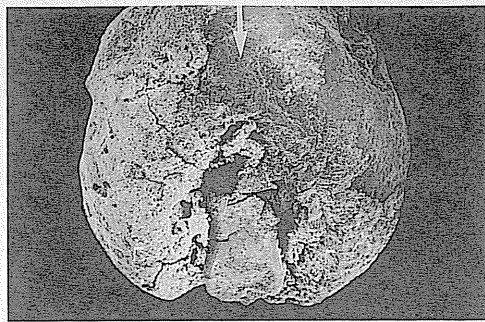


第8表 N426遺跡フローテーション基礎台帳

遺構名	層位	サンプル名	採取容量 ℓ	L, F総重量(g)	骨片等重量(g)	H, F総重量(g)	骨片等重量(g)	発掘区名	サンプル No	備考
第1号竪穴住居跡		カマド内焼土	9.8	7.74	0.06	289.3	3.59	C-8	5009~5012	
第2 A竪穴住居跡	床面	焼土1	8.7	11.32	(?)0.02	5.4	0.01	A-6, A-7	5013, 5014	A竪穴住居跡の床に相当
〃		カマド内焼土	28.9	73.19	0.08	298.9	2.05	A-6, A-7	5015~5022	新しい
第2 B号竪穴住居跡		カマド内焼土	13.5	37.64	0.03	166.3	0.56	A-6, A-7	5023~5027	古い
第3号竪穴住居跡	黒色土	焼土1	3.7	10.42		2.6		B-6, B-7	5001, 5004	第3号竪穴住居跡はカマドを欠く
〃	黒色土	焼土2	5.2	22.25		5.3		B-6, B-7	5002, 5005	
〃	床面	焼土3	6.1	12.17		20.1	0.01	B-6, B-7	5007, 5008	
〃	黒色土	焼土4	1.9	0.52		12.1		B-6, B-7	5006, 5003	
〃	黒色土	P-14ツボ内の土	0.8	1.66		8.5		B-6, B-7	5029	
第5号竪穴住居跡		カマド内焼土	61.0	61.82	0.05	2015.2	1.44	E-3, 4 F-3, 4	5043~5056	
〃	床面	床面5030	3.7	1.05		23.8		E-3, 4 F-3, 4	5030	※5030~5042は床面を1m角に切ってサンプル
〃	〃	床面5031	4.0	0.63		23.5		E-3, 4 F-3, 4	5031	
〃	〃	床面5032	5.6	1.49		26.8	0.03	E-3, 4 F-3, 4	5032	
〃	〃	床面5033	5.0	0.82		52.2		E-3, 4 F-3, 4	5033	
〃	〃	床面5034	4.8	2.80		37.0		E-3, 4 F-3, 4	5034	
〃	〃	床面5035	4.2	0.77		16.8	0.09	E-3, 4 F-3, 4	5035	
〃	〃	床面5036	4.0	1.03		19.2		E-3, 4 F-3, 4	5036	
〃	〃	床面5037	3.7	0.68		4.4		E-3, 4 F-3, 4	5037	
〃	〃	床面5038	3.2	0.72		8.8		E-3, 4 F-3, 4	5038	
〃	〃	床面5039	2.8	0.93		12.3		E-3, 4 F-3, 4	5039	
〃	〃	床面5040	2.5	0.40		7.6		E-3, 4 F-3, 4	5040	
〃	〃	床面5041	3.5	0.38		5.3		E-3, 4 F-3, 4	5041	
〃	〃	床面5042	2.9	0.39		8.0		E-3, 4 F-3, 4	5042	
〃	〃	SP-1 (柱穴)	2.4	2.64		53.8		E-3, 4 F-3, 4	5047	
〃	〃	SP-2 (〃)	3.0	0.65		43.8		E-3, 4 F-3, 4	5048	
焼土1	〃	焼土1	5.6	—		—		A-6	5028	発掘区 (擦文時代包含層)
焼土2	〃	焼土2	28.2	65.26		74.5		E-2	5057~5062	〃 (縄文時代晩期包含層)



1 a アワ ×35



2 a キビ ×35

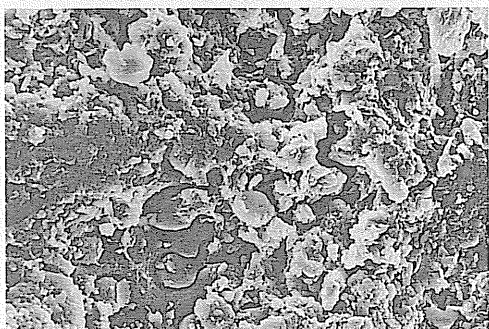


1 b 1 aの拡大 ×75



2 b 2 aの拡大 ×1000

スケール「」の間の間隔 1.0mm

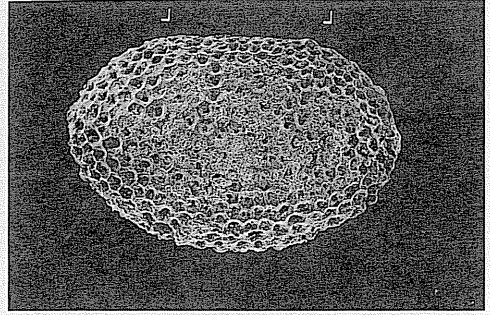


1 c 1 bの拡大 ×1000

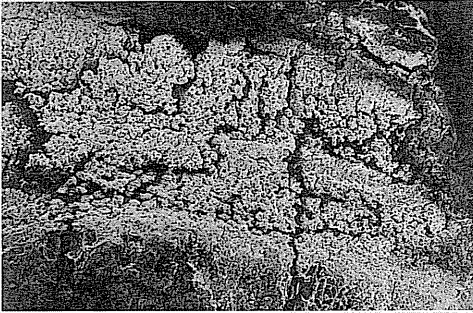
出土種子



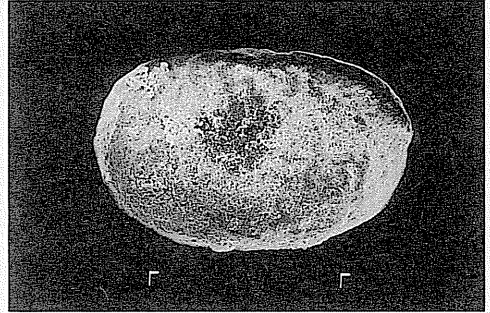
3 a マメ科 ×35



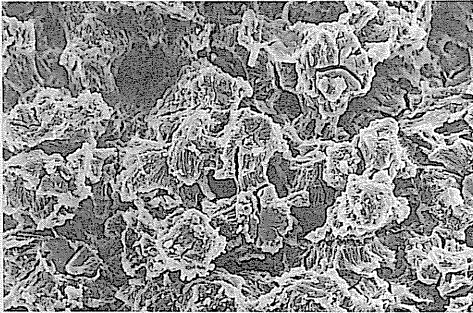
5 マタタビ属 ×35



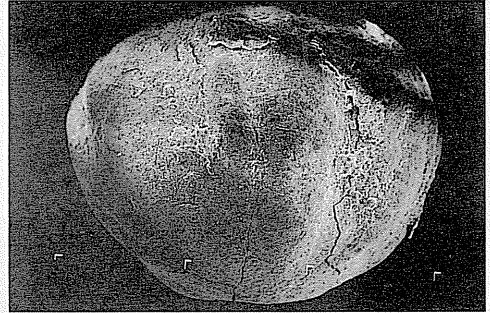
3 b 3 a ↓ の拡大 ×75



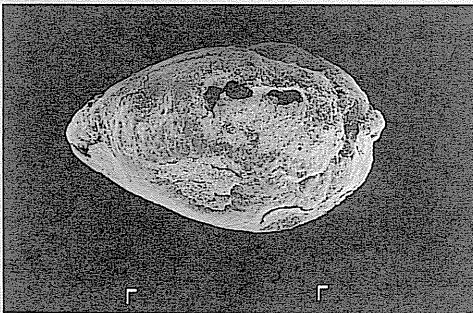
6 ニワトコ属 ×35



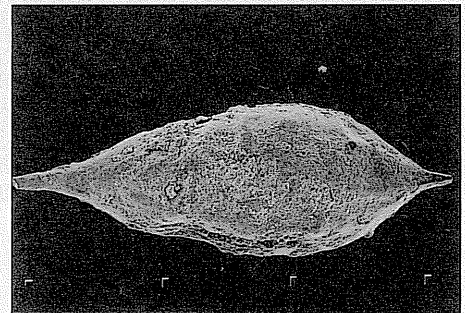
3 c 3 a ↓ の拡大 ×1000



7 ミズキ属 ×35



4 タデ科 ×35



8 不明種子 ×35

スケール 「 」 の間隔 1.0 mm

出土種子